

開催報告

令和7年度 「教育文化プランナー」 専修講座

7月14～15日、令和7年度「教育文化プランナー専修講座」を開催し、全国のJAから家の光事業・教育文化活動の担当部門長など約30名が参加しました。

JAの存在価値と強みを発揮しながら、JAをよりどころとした身近な活動を多彩に展開する上で教育文化活動の重要性が高まっています。その旗振り役として大きな役割を担う、教育文化プランナーとしての基礎学習と実践力を高めることが目的です。

講義、グループ討議・発表、パネルディスカッションを通し理解を深めた参加者は最後に、「私の3か年計画(教育文化プランナーとして取り組むこと)～わがJAの10年後の姿を描きましょう～」をテーマに事後レポートをまとめました。



教育文化活動と 教育文化プランナーの役割

家の光協会 普及文化本部 本部長

熊田 陽介

「皆さんのJAは10年後も元気ですか？ 10年後も地域に輝くJAですか？」

本講座のコーディネーターを長く務めていただいた坂野百合勝さんの言葉です。JA運動の原理原則を踏まえた上で、新たなJAを探求し新たな事業を展開しなければいけないと常々話されていました。



■ 組合員・地域住民の願いを実現しJA経営にも効果

教育文化活動の目的は、組合員、家族、地域住民の多様な「6つの願い」(身体面、経済面、精神面、環境面、社会貢献、自己実現)の実現による「幸せづくり」と、組合員、家族、地域住民の仲間づくりにあります。そこをめざして、①教育・学習活動、②情報・広報活動、③生活文化活動、④組合員組織の育成活動の4つの活動領域で実践していきます。そして、組合員(家族)と組合員(家族)を結ぶ横糸の役割、JAと組合員(家族)、地域住民を結ぶ横糸の役割、JAの事業と事業、事業と活動を結ぶ横糸の役割、JAの地域貢献活動を促進する役割を果たしているのです。

活動を通じて地域でのJAの存在価値、結集力が高まり、利用が増えることで、総合事業としての経営面でも、各部門に波及し間接的な収支効果が見込まれます。

■ 教育文化プランナーに求められる3つの役割

そのなかで、教育文化プランナーの皆さんには、①「企画者」(プランナー)、②「実務者」(ディレクター、マネージャー)、③「啓発者」(エデュケーター)としての役割を発揮されることを期待しています。

協同組合運動と 教育文化活動の重要性

日本協同組合連携機構 常務理事

小林 元氏



■ J A 組織基盤の大きな変化に対応

皆さんが取り組んでいる教育文化活動は、活動すること自体が目的化していないでしょうか。

京都大学名誉教授だった藤谷築次氏が1971年に発表した次の公式は、今も有効です。

$$J A \text{ の事業分量} \div \text{組合員の平均利用率} \times \text{組合員の経済活動量} \times \text{組合員数}$$

このうち、便利な選択肢が増えることで利用率は下がり、基幹的農業従事者数の減少で経済活動量が減り、人口減少、世代交代により組合員数は減ってきています。

このように、J A の一番の強みである組合員の組織基盤は、大きく変わってきています。第30回 J A 全国大会決議でもこれをふまえ、組織基盤強化があらためて掲げられました。

こうしたなか、10年後20年後を見据えて、今、誰を対象に何をするのかを考えて教育文化活動を組み立てることは、とても重要になっています。参考となる事例やヒントは、家の光協会が『家の光』や『J A 教育文化Web』などのWeb媒体、各種資料などでたくさん紹介していますので、ぜひ、自分のJ A の状況に合わせて活用してください。

■ 教育文化活動は J A 事業の競争力の源泉

組織基盤を強化するためには、組合員・地域住民との関係性の強化、加入促進が鍵となります。

そのためにたいへん有効な取り組みが、教育文化活動です。J A の事業に貢献するのかという質問がよくありますが、むしろ一丁目一番地。J A 事業の競争力の源泉と言えます。ですから教育文化プランナーの皆さんは実は、J A 経営を良くするための中核の活動に取り組んでいるのです。現状をチェックして、改善案と今後のプランを策定・実践するP D C Aサイクルと、それらにJ A 一丸となっ

て取り組むための体制整備を、皆さん自身が実践していくことが期待されます。

協同組合は、同じ課題、同じ願いを持つ人々が集まり、事業を通じて課題を解決し願いを叶える組織です。あなたは、自分の仕事や協同組合、JAというものを、自分の言葉で語れるでしょうか？

講義③

地域のだ真ん中にあるJA そのカギは教育文化活動

～君と一緒に楽しい ひとり一人を元気に創造カンパニー～

JA教育文化活動専門講師
菅野 孝志 氏



私は平成14年にJA新ふくしま(28年合併しJAふくしま未来に)で総務部長となりました。企画部門を担当してから教育文化活動のあり方について職員からの提案を受け、それまでバラバラに一過性で活動していたものを一元化して、食といのち、元気な農業、地域との共生をめざし「心を育む運動」として体系的に活動できるようにしました。

その後、23年に東日本大震災が起き、放射能問題から、食農教育での農業体験や地元農産物で加工品を作り食べるといった活動は不可能に。代替策として花育を始め、管内で栽培した花で生け花を作る体験を通し、子どもたちと家庭に笑顔が戻るようめざしました。

家の光大会には女性を中心に多くの組合員が参加。各JAからの発表も参考に自分たちの現場に落とし込み、企画していきました。

■ 教育文化活動、協同組合について職員研修

平成20年より教育文化活動役職員研修会を開催し、坂野百合勝先生をはじめとした先生方に講演をいただけてきました。22年からは職員協同組合アカデミーを開講し、手上げ方式で参加した職員に、地域のだ真ん中にJAがあり、その主体は組合員・利用者で、カギは教育文化活動であることを伝え、活動を企画立案、運営支援できる職員、真の協同組合人の育成を図っています。

■ プランナーの皆さんに聞きたいこと

私は、「いいと思ったことはやろうよ!」と声をかけながら取り組んできまし

た。教育文化プランナーの皆さんには今、こう問いかけたいと思います。
「寄り添えてますか 離れていませんか サポート役に徹してますか」

講義④

教育文化活動の目的、事業、効果 ～「組合員、地域住民との関係強化」を実践～

J Aみえなか 専務理事
岡田 勇樹 氏



当J Aでは「組合員・地域社会になくてはならないJ A」として、次代につなぐ総合事業と協同活動の基盤づくりを行うため、1支店等1協同活動に取り組んでいます。活動を強制はしないものの、支店長会議などで取組報告があり表彰もするので、地域ふれあい活動、CSR活動、支店・事業所だより発行など活動は年々増えています。

支店運営委員会は、地区役員、総代、生産部会会員、女性組織会員、青壮年部会員などに参画いただき、元気な地域と店舗づくりに生かしています。

教育文化活動は目に見える結果がすぐ出るものではありませんが、例えば、女性組織の活動などに集まる皆さんに、貯金や年金振込などのチラシをまけばどうなるでしょうか。

■ 究極のふれあい活動「J Aみえなか郷土資料館」

養蚕がさかんだった一志町に開いた「J Aみえなか郷土資料館」は、組合員など地域の方々が運営・管理を行っており、究極のふれあい活動だと思います。

蚕の飼育展示、まゆクラフト体験などが行われ、桑畑もJ Aの所有です。県内外から多くの見学者があります。

■ 各部署の情報発信委員などが頻繁に投稿

当J Aでは各部署に置いた情報発信委員を中心に、J A内イントラネットに頻繁に取り組み報告が投稿されます。そのタイムラインを全職員が閲覧することで、人材育成の1つとなっています。また、投稿内容をもとに広報担当がSNSを積極的に更新し、広報誌とともにPRに活用しています。

最初からうまくいく活動は少ないので、課題点を改良しながら根気よく継続していくことが大事です。次世代との接点づくりに向けてJ Aファンづくりを行うには、役職員の理解と連携が必要です。

グループ討議では、参加者は6グループに分かれ、3つのテーマについて、講座で学んだことや自分のJAでの状況をふまえ意見交換を行いました。その後の発表では、次のような意見が挙げられたことが報告されました。



【テーマ1】 教育文化活動の展開によって どのようなJAの姿をめざしたいか

▽食と農を軸に地域密着で世代を問わず参画。▽組合員と距離が近い。▽「JAがあってよかった」「JAで働いてよかった」と思える。▽門前払いされない、組合員との距離が近い。▽利用者から提案・要望が多く出る。▽職員が自分の言葉でコミュニケーションできる。▽部署間で連携が取れる。▽接点ができた准組合員といい関係をつくれる。▽教育文化活動による対話を通じ組合員の願いを知る。▽組合員とJAと一緒に、組合員主役に自主的運営。▽職員が地域に貢献・参画。

【テーマ2】 教育文化活動を進める体制をどのように築き、 どのように実践するか

▽トップの明確な意思表示を受け、支店、直売所等が計画・立案・実践。主幹部署が結果分析を行い活動と事業の好循環を生む。▽基本方針の策定、職員への研修。▽活動に来てくれた人を大切に。▽教育文化活動を担う部署、運営委員会の設置。▽教育文化活動の取り組みを報告し表彰する場を設置。▽活動を収益化しコストと効果が見える化。▽部門間連携へ各事業部門の代表が出席する定例会を実施。▽トップからの本気のメッセージ。▽管理職が自分の言葉で若手職員や組合員に伝える。▽教育文化活動について学習機会をつくる。▽『家の光』の職員購読・記事活用、動画による情報発信。▽JA事業、女性部活動の幅広い発信で見える化。

【テーマ3】 JA役職員の教育文化活動への理解を深めるために、 どのような方策が必要か

▽実践の成功体験を評価・共有し、実体験から学べる教育文化活動への理解を深める。▽階層別の研修。▽職員と組合員の合同研修会。▽管理職の昇格要件に教育文化活動を入れる。▽事業推進大会で教育文化活動の目標を提示。▽組織内・利用者向けSNSで『家の光』や活動を案内。▽家の光協会が開催する研修会への積極的な参加。▽部署を横断した課長、係長レベルの情報交換を行う目的の会議。▽教育文化活動を含むJA事業範囲を図式化し職員・組合員へ共有。▽実務として教育文化活動を理解するための表彰制度。▽トップに研修会などを通じ理解してもらう。▽幹部職員から一般職員に周知。

日本協同組合連携機構 常務理事 **小林 元** 氏
JA教育文化活動専門講師 **菅野 孝志** 氏
JAみえなか 専務理事 **岡田 勇樹** 氏
家の光協会 普及文化本部 本部長 **熊田 陽介**



小林：お三方から、教育文化プランナーの皆さんへの期待をお願いします。

菅野：自分たちの行っている組織活動と事業とのつながりについて、教育文化活動の4つの領域にどのように関わり、どことどこがどう関連し合っているのかを整理して、職員間、そして部課長、役員へと報告・議論するなかで、わがJAは何をめざすのかを皆で固めていく。そうするとやるべきことが見えてくるのではないのでしょうか。

そこへ向けては、今日ここに来ていること自体が良いことなのだと思います。これを機に、他JAの話も聞きながら活動の棚卸しを行い、具体的な方向を考え行動を起こされることを期待しています。

岡田：皆さんが悩んでいることや課題に思っていることは、多分皆、大なり小なり同じだと思います。皆さんは1人じゃない。情報を別組織でも共有できることは、JAグループの強みだと思います。そもそも農協は、1人ではできないけど大勢ならできるといふ願いの実現のためにできた組織。皆さんも、2人3人と仲間がいれば一緒になって進んでほしいと思います。時間はかかりますし、今やっ

でもすぐ効果は目に見えませんが。ただ絶対に、10年先、5年先にはファンもでき、元気な地域もできてくると思いますので、それを信じて取り組んでいただきたいと思います。

役員には、これやるのを1年遅らせたら10年は遅れますよ、と言ってほしいです。「自己改革の一環としてやりたいんです」と言うのもいいと思います。

また、外部の研修にはぜひ行ってください。ご自身の部下にも行かせてください。井の中の蛙にならないように。

熊田：教育文化活動は、J Aの基本的な活動の軸、中心軸だと言えます。その支援をしている団体は、全国連の中では家の会協会だけと自負しているところがあります。今後も事例の情報提供などご協力いただきたいと思います。

また『家の光』の強みは、食料安全保障を分かりやすく、特集で記事にできる雑誌であるということ。そして自己改革も、組合員に届きやすい言葉で分かりやすく記事にできる雑誌だということ。これをJ Aの皆さんにお伝えいただければと思います。今後とも家の光事業展開へのご理解をよろしくお願いいたします。

小林：ありがとうございました。